

筑波大学日本文学会会報

第12号

昭和63年 1月

絵の世界から……………桑原博史……………	一
日本文学会だより……………	四
研究室だより……………	五
教官新刊紹介……………	八
卒業生だより……………	十
日本文学会教官学生名簿……………	十七

絵の世界から

桑 原 博 史

今年も松木重雄氏の絵を買うことはできなかった。

松木氏は大正六年長野県の生まれ、昭和五六年筑波大学を停年退官されている。その前年のことだから、五五年の秋のことだった。常磐線の荒川沖駅から日暮里駅まで、物理学系の原康夫氏と私ともう一人（これが誰であったか、まったく記憶にない）が、松木氏をかこんで、四人でワンボックスを占めて歓談したのである。

私ははじめて松木氏と会ったのだが、そんなことにはかまわず色々と語る氏のふうぼうは、その時に氏の身につけていた赤いマフラーの色とともに、あざやかに印象に残っている。

氏は停年になることを非常に喜んでおられた。教えていたら、自分の絵は書けないのですよ、早く自分の絵を書く生活にもどって、好きな絵を書きたい、と何回も口にされた。自分が書いていて楽しい絵というのは、決して売れない、売れる絵というのは自分が不本意で書いたものだ、とも言われた。世の中には変わった人がいてね、ぼくがカレンダーに頼まれた絵と同じ絵を、三号の大きさで書いてくれなどという注文もあるんだよ、とも言われた。

私ははじめて身近に見た画家というものに、すっかり魅了されて、その話を夢中になって聞いた。政治家三木武夫氏に絵を教えるが、それは教えるというのでなく、一定時間、いっしょに絵を書くだけであること、お礼はその夫人の手料理を夕飯としていただくだけであること、三木氏に頼まれたのは、松木氏が若い頃、政治家になるか画家になるか二つの道を歩いていた時期があつて、その時からの縁であることなども、氏の口から語られた。いや、ぼくの先生が真顔で言ったんだなあ、松木よ、お前二つの兎はつかまえられるよ、一つにしなくちゃだめだよ、ぼくは考えちゃったなあ、さんざん考えて、結局、絵の道をえらんだんだよ、と語る表情の明るかったこと。

氏が停年後ひらくと言っておられた個展は、五七年四月のことであつた。新宿伊勢丹の「インカを描く松木重雄展」である。初日に出かけて、おずおずと名乗りあげる私を、もちろん氏は記憶していなかった。それでも、おや、そんなことがあつたかなあと言いがら、無難作に図録を一冊、私に下さり、いくつかの絵の前で説明してくれた。ほとんど八〇号から一〇〇号の大作である。

「ラ・サリーナスの少年（千いた塩湖）」という題の絵の前で、ほら、この横に一線白いのが塩の湖なんだよ、これを見つけて、ああ絵にかきたいと思って、しかし何か足りないと思って立っていた、そしたらるばる乗った少年が通りかかった、おお、頼む頼むと手まねでそこに立ってもらつて、急いでデッサンしたのがこの絵なんだ、と、あいかわらずキラリと光る話である。

松木氏と会ったのはこの二回だけ。その所属する示現会展や、出入りしている画廊をたずねて、私は、氏の絵の魅力が、白の色彩を配するところにあることを知った。六二年一〇月はじめ、新宿伊勢丹の美術市に「白い古城（南イタリア）」と題する三号の絵が出ていることを知って、さっそくに出かけた。白い古城とまっさおな空と、氏のもっとも基本にある色どりに、私の気持ちは動いた。しかしあいにくその日は、私自身の残された余生にかすかな不安を抱いた、病院からの帰り道であつた。

私は、松木氏の絵を一枚も持たずに終るかもしれない。

服部正一郎氏にいたっては、私は一度もお目にかかったことがない。その孫にあたる青年を通じて、牛久ワインのラベルの絵が、氏の書いたものであることを教えられ、かつ、氏が生涯、職についたことがなく自由を楽しみ、八〇代にしてかくしゃくとしていることを知った。もちろん、二、三の知人から、氏の画業の歩みや画壇における地位なども、次第に耳にすることになったが、絵そのものは

見たことがなかったのである。

しかるに六二年二月、神田の画廊で開かれた個展の案内を、青年からいただき、何気なく出かけた。「筑波春色」と題する一〇号の絵を見ていて、そのあまりの明るさに人知れぬ私の胸の古傷が痛む思いがした。

家に帰ってその図録を見ているうち、春の筑波山が紫色系の色で描かれていることに気付いた。筑波山は秋の終わりに紫色に見えることから、紫峰という別名がある。春には、紫色系にはならない。その不審は、服部氏の絵が実景の模写でなく、美しいものを組み合わせた心の風景を描くものと考えた時、不審でなくなる。

御礼をかねて、そんなことを孫の青年にはがきに書いたが、服部氏自身はどうお考えであろうか。「牛堀水郷」（八号）と題する絵の、河の流れが画面のなかばを占める構図も、あの河床の高い土堤ぎわを車で行った時、水の流れの豊かさに驚嘆した印象と、まったく重なるのであるが。

私は、竜ヶ崎市に生まれ育った服部氏が、筑波山をめぐる風土に、心のふるさとのなものを抱いていることを強く感じた。いつの日か、私が服部氏の絵を買うことがあったら、それは筑波山がどこかに見えている絵であろう。